

障害のある子どもの在宅環境の現状と課題 —転居した事例にみられる転居前後の入浴時の抱きかかえ介助の変化—

The living environment of orthopedically-impaired children:
Changes in bathing assistance after change of residence

西村 顕¹⁾・野口 祐子²⁾・林 志生³⁾・阪東 美智子⁴⁾

Nishimura Akira, Noguchi Yuko, Hayashi Shio, Bando Michiko

1. 背景・目的

肢体不自由児に対する在宅での入浴介助は、子どもの身体機能や介助者の状況、浴室環境等に影響され、多様な介助方法がとられている¹⁾。特に入浴用リフトを使った介助方法については、子どもへの導入例は全国的にみても極めて少なく、その利用実態等は報告されていない。

本調査では、浴室環境の変化が子どもの入浴状況、介助者の介助方法および生活スタイルにどのような影響を及ぼしているのかを、明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

本調査は、横浜市総合リハビリテーションセンターで新築相談を実施した1世帯(子ども:11歳、女兒、脳性まひ)に着目し、転居前後の入浴状況の変化について確認した。相談者の母親は、長年の介助によって腰痛を患い、転居に向けて入浴用リフトの設置を希望していた。子どもの概要を表1に、相談の流れを表2に示す。調査方法は、筆者らが転居前および転居後に家庭訪問し、母親からのヒアリングを行うとともに、実際に入浴介助を擬似的に実施してもらい、その様子を分析するためビデオカメラによって記録した。また、長期的な変化を確認するため転居後、約8ヵ月後に電話によるヒアリング調査を実施した。

表1 対象児概要

年齢/性別	11歳(特別支援学校6年生)/女
疾患/障害	脳性麻痺/四肢麻痺
身障手帳	1級(両上肢機能障害、体幹機能障害、言語機能障害)
身長/体重	135cm/15kg
同居家族	父(30代/会社員)、母(30代/専業主婦)、姉(双子)

表2 相談の流れ

2009. 7	福祉機器支援センターで相談(リフトの見学、評価)
2009. 10	福祉機器支援センターで評価(家族、工務店、リフトメーカー)
2010. 2	転居。リフトの吊り具の評価。
2010. 4	完了検査。

3. 調査結果

3.1 浴室環境の変化

転居前後の浴室環境の仕様を表3に示す。浴室の大きさは、幅・奥行きともに約40cm拡大し、扉の開口幅も約40cm拡大している。約20cmあった出入口の段差も0cmに解消され、浴槽は和洋折衷式の使いやすい仕様になっている。寝室から浴室まで天井走行式リフトを設置し、寝室には電動ベッドも新たに導入した。

3.2 介助方法の変化

入浴介助の流れを 脱衣・移動 洗体 入浴 着衣・移動の4項目に分けて、転居前後の母親の介助方法を比較した(表4)。

転居前: 寝室の床面から子どもを抱き上げる介助からはじまり、抱きかかえた状態での移動、洗い場内での入浴用いす(高さ約20cm)への上げ下ろし、抱きかかえた状態での浴槽利用、そして入浴後は、脱衣室(脱衣室が狭いため廊下部分も利用)で一旦床

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター
地域リハビリテーション部 研究開発課
2) 聖学院大学
3) 目白大学
4) 国立保健医療科学院

表3 転居前後の浴室環境等の変化

	転居前 (2009.11)	転居後 (2010.4)
居住形態	賃貸/共同住宅	持家/戸建住宅
居住面積	約62㎡	約65㎡(1階部分)
浴室仕様	1216/ユニットバス	1620/在来工法
扉仕様/幅	折戸/61cm	三枚引戸/100cm
浴槽の縁高さ/深さ	54cm/56cm	40cm/50cm
浴室出入口段差(外/内)	20cm/13cm	0cm/0cm
脱衣室有効面積	約0.8㎡ (67cm×120cm)	約4.0㎡ (165cm×240cm)
福祉用具	入浴用いす バスマット	リフト 入浴用いす
寝室状況	ふとん	電動ベッド
入浴頻度	毎日 (月-金:母、土日:父)	週5回 (月金:母、水:訪問看護、 土日:父)

におろして、身体を拭く。そして再び床から抱き上げ、寝室へ移動して床面に降りし着衣をするという流れだった。子どもを床面や入浴用いすへ抱き上げる、抱き下ろす動作が計8回あった。また、子どもを抱きながら移動する場面は4箇所で見られた。

なお入浴の頻度については、週5日(平日)は母親が実施し、土曜日および日曜日は父親が入浴介助を担っていた。父親の介助方法はほぼ母親と同様であった。

表4 入浴介助の流れ(母親の場合)

	①脱衣・移動	②洗体	③浴槽利用	④着衣・移動	浴室周辺の環境と介助時のコメント
	寝室(寝)	脱衣室(脱)	浴槽(浴)	洗い場(洗) 脱衣室(脱)	寝室(寝)
転居前	床	入浴用いす	抱きながら浴槽に出入り	入浴用いす 床(廊下)	床
転居後	ベッド	入浴用いす	リフトで浴槽に出入り	ベッド	ベッド
凡例:	▲ } 子どもを抱き上げる ▲ } 抱き上げる場所		▼ } 子どもを抱き降ろす ▼ } 抱き降ろす場所		▲ } リフトで吊り上げる ▼ } リフトで降ろす
	—————	
	子どもを抱きながら移動		リフトで移動		

転居後：天井走行式のリフトを寝室から浴室まで設置したため、母親はリフトを活用することで子どもを抱きかかえる介助は、まったくしていないことがわかった。脱衣室を着脱衣の場所として利用することはなく、リフトで通過するのみであった。子どもの濡れた身体を水滴が落ちないようにタオルで覆いながら、寝室のベッド上までリフトで移動していた。

また入浴頻度は、準備や吊り具着脱の手間、リフト昇降速度の遅さなどが原因で、母親の入浴介助の回数が減っていた(週5回 週3回)。また、子どもの体調悪化により訪問介護による入浴を開始していた。

一方、土曜日および日曜日は父親が入浴介助を継続しているが、父親はリフトを使わず、抱きかかえ介助により子どもと一緒に入浴をしていた。

その他リフト設置による大きな変化としては、母親が子どもと一緒に入浴をしなくなったことである。

4. 長期的な効果

環境整備後約8ヵ月後に、電話によりヒアリング調査を実施した。その結果、母親はリフトの使い勝手に慣れ、入浴回数は環境整備前の週5回に戻り、浴室環境およびリフトへの満足度も高いことが分かった。なお、父親は、抱きかかえ介助はしているものの、転居前よりも浴室が広くなったことで介助はしやすくなったとの意見を聞いた。

5. 考察・まとめ

5. 1 介助方法について

腰部負担の問題：リフト設置等の環境整備により床からの抱きかかえ介助が無くなることで、介助者の腰部負担の問題は概ね解消できたと考える。

子どもと介助者（親）が一緒に入浴する問題：抱きかかえ介助をしている多くの親は、子どもと一緒に裸になり入浴をしている¹⁾。

さらに、本事例のように脱衣室が狭い場合は、居室から裸で子どもを抱えて脱衣室を通過して、浴室まで移動することになる。その結果、とくに入浴後は、親も子どもも身体がぬれているため抱きかかえ介助は滑りやすく、非常に危険な状況となっており、子どもが風邪をひかないように親は急いで動作をおこなうため、抱きかかえ介助の際に、子どもの頭や足などを壁や扉にぶつけてしまう可能性も危惧される。

本調査の結果、居室から浴室まで天井走行リフトを設置したメリットは、単に移動・移乗動作の介助負担軽減への効果だけではなく、親の入浴スタイルの変更（服を着て介助ができる）による関連動作のリスクの軽減にも、高い効果があることが示唆された。

5. 2 入浴頻度および継続性について

リフト設置直後には、準備や吊り具着脱の手間、リフト昇降速度の遅さなどが原因で、入浴回数の減少がみられた。しかし、約8ヵ月後の電話によるヒアリング調査では、入浴回数は増加していたことが分かった。たとえ環境整備前にシミュレーションを実施しても、実際の生活でリフトの操作に慣れる期間が一定期間必要であると考ええる。

一方で、父親はまだリフトを使っていないこともわかった。いずれにしても、本来の目的であった母親の介助負担の軽減については、リフト導入等の環境整備により達成できたといえる。今後、このリフトがどのように使われていくのか、特に父親の役割や家族のライフスタイルの変化などを注視しながら、住環境整備の長期的な効果について検証していく必要があると考ええる。

〔第25回リハ工学カンファレンス

（2010年8月26日～28日、宮城県仙台市）にて発表〕

参考文献

- 1) 野口祐子、橋本彼路子、阪東美智子：障害児の育成と自立支援のための住環境整備に関する研究．平成19年度みずほ福祉助成財団社会福祉助成事業(研究助成)研究報告書，2008

本研究は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金の助成により実施した。